

人民中国編集部編

中国の民話一〇選
3



人民中国編集部編

中国の民話二〇選 3

中国の民話101選

第3巻

昭和48年12月13日 初版第1刷発行
昭和49年4月30日 初版第2刷発行

編訳者 人民中国編集部
発行者 下中邦彦
発行所 株式会社平凡社

東京都千代田区四番町4番地／郵便番号102
振替 東京29639／電話 03-265-0451

印刷 フォト印刷株式会社／製本 株式会社石津製本所

不良本のお取換えは直接小社サービス課まで
お送り下さい（送料は小社で負担します）。

© 株式会社 平凡社 1973

目次

| | |
|----------------------------------|----|
| おさるの裁判官…………… | 3 |
| とらはうさぎを食べる権利があるか、さるの判決 | |
| 十二月老人のはなし…………… | 9 |
| 吹雪の森に花つみにきた娘は十二月老人に森を春にかえてもらう | |
| ゆめに出てくる黒い牛…………… | 21 |
| ゆめに出てくる黒い牛は働き者の弟をたすけおうちやくな兄をこらす | |
| 金瓜坊やと銀豆っ娘…………… | 27 |
| 瓜から生まれたむすこと豆から生まれた娘は両親のために宝の山へ | |
| 鈴鐘児…………… | 41 |
| 鳥のことばがわかる鈴鐘児はかささぎに案内されおおかみ谷の弟を救う | |

ろばの耳……………56

生きるか死ぬか、ろばは機先を制してとらのどきもをぬく

五人の娘たち……………63

父親に山におきざりにされた五人の娘は熊の化け物を退治する

マリクとラニハン……………79

王子にさらわれたラニハンは苦難のすえ夫のマクリと再会

茶の山の霧……………90

ほおじろの羽を身につけた香娘は天の御殿で魔法の小箱を盗みだす

靈芝草の話……………98

靈芝草を頭にさせばすがたが消えると信じた地主はどろぼうにいく

人間世界におりた天女の話……………105

天女を妻にした董永はひょうたんにのり二人の子をつれて天宮へ

孟姜女のはなし……………113

ひょうたんから生まれた孟姜女は夫の范喜良をたずねて旅にでる

宝の船

宝の船で大水をさけた王小はへびとありとみつばちを救ったが

大工の神さま

魯じいさんの末息子魯班は終南山の大工の神さまに弟子入りする

おじぎ草のはなし

蛇の精にさそわれて気の弱い若者はやさしい蓮花娘をすててしまった

とらのおばあさん

四人の娘を食べようとおばあさんになりましたとらが戸をたたく

ひょうたんのまくら

ひょうたんのまくらから頭がすべり落ちたらおきて働くイェンハンポン

おしどり

親に結婚を反対されたツープとアンラーは死んでおしどりとなる

子どもの羊かい

動物のことはをおぼえた羊かいは王さまの病気をなおす

122

134

149

162

173

187

196

幸福をさがしあてたウースエイ……………207

幸福をさがしに旅に出たウースエイはやつと仙人に出あつたが

騎士と仙女……………215

仙女チヨマ姫と騎士の愛情はチヨマ姫に化けた悪魔にさまたげられる

仙術くらべ……………238

仙術修行に出た二郎は太上老君の娘花莉の助け舟で老君と仙術くらべ

人間をまかした鳥の話……………254

北の国の森にすむお話しようずの鳥は人のため息をきくとにげてしまう

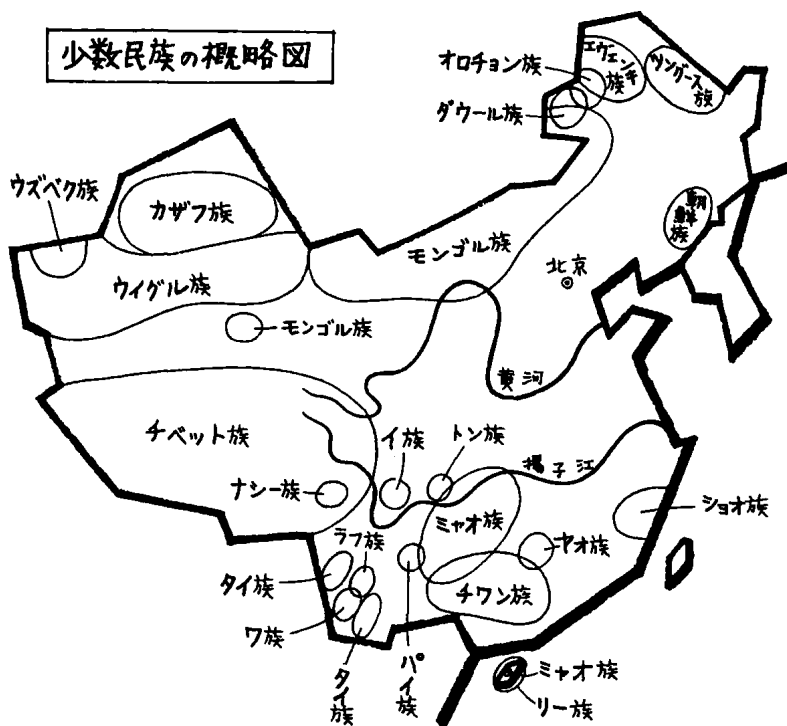
鹿のお嫁さん……………261

阿宜は鹿のお嫁さんになり姉のいじわるにもまげず夫と子につくす

赤い泉……………278

赤い泉の水をのんだ玉花は赤い顔の楓のお化けにさらわれる

中国の民話101選 3



おさるの裁判官



あるところに、こんもりしげった森がありました。そこにはむかしから、さまざまの鳥やけだものがすんでいました。ある日、ひとりの猟師がやってきて、森のなかの小道に、おとし穴をほりました。大きな深い穴ですが、上に木の枝や枯れ草をしいて、土をかぶせたので、すこしもかわった様子には見えません。それを木の上から、一びきのさるが見ていました。猟師がいつてしまうと、さるはキツキツキツといってわらいました。

「うまいこと穴をほって、なかなかやるもんだ。この目で見ていなかったら、こっちもひっかかったかしれんで。まてよ、おもしろいことになりそうだぞ、いったいどんなやつがこのおとし穴にはまるか、ここで見てやるとしよう」

まもなく、むこうから一びきのママさんうさぎが出てきて、おとし穴のほうに近づいてきました。さるはきゅうに、うさぎがかわいそうになり、木の枝からとびおりて、うさぎのゆくてをさえぎり

ました。うさぎはびっくりしましたが、よく見るとさるなので安心し、

「おやおや、おさるさんでしたか、そんなにおどかすもんじゃありませんよ」

「おどかすわけじゃありません。いったい、どちらへお出かけて？」

「ほら、あの森へ行って、子どもたちに草をとってこようとおもって」

「そうですか、しかしこの道は通らないほうがいいですよ」

さるは前のほうをゆびさしながら、声をひくめて、

「あそこに、獵師のしかけたおとし穴があるんでね」

うさぎは何度もおれいをいって、ちがう方角にびょんびょんはねていきました。ところがまもなく、うさぎの前に、おおかみが一びきあらわれました。

「ようう」

おおかみは、きばをむいていいました。

「ちようどいいときにきてくれたもんだ。こっちはいま腹ぺこ、おやつにありつけるとは、かたじけない」

うさぎはあわてましたが、こうなつてはもう、にげるわけにもいかず、きもったまをすえて、いかえしました。

「わたしたちは、おたがいにこの森にすんでいるもの、おまえさんにどんな権利があつて、わたし

を食べようとするんだね」

おおかみはいじのわるい笑い声をたてて、

「腹がすいたら、食べなきゃならん、それだけのことさ」

「そんなりくつがあつてたまるものかね。だれかほかのものに、どっちが正しいか、きいてもらわなければ……」

そこへひょっくり、きつねが顔を出しました。そこでおおかみは、

「それじゃ、きつねの兄いにきいてみたらよかろう。

このかいわいで、いちばんもののがわかつたおかたじゃ」
そこで、きつねがいました。

「きみたちのいいあらそいは、さっきからきいて、よくわかつている。うさぎのおばさん、あんた、いさぎよく食われてしまうことだね。それが真理しんりというものだ」



うさぎは承知せず、ほんとうに公正なひとにさばいてもらいたい、といつてききません。おおかみもしかたがないので、「よかろう」といいました。こうしてうさぎとおおかみは、さっきのさるのところへいきました。さるは双方のいいぶんをきき、目をばちばちさせながら、しばらく考えて、こういいました。

「おおかみはうさぎを食べる。だからおおかみはうさぎよりすぐれた能力をもっている。なるほど、そういうわけですね。しかし、おおかみさん、あなたのどこがうさぎよりすぐれているのか、その点をまず、はっきりいってもらいましょうか」

「そんなこと、とつくにわかっているじゃないか。おれのこのきは雄牛おつしでもかみころせるんだし、それからこの足は、かもしかにだつて追いつけるんだし、また……」

「ちょっと、まってください。そんなにはやく走れるというのは、どうですかねえ」
そばからきつねが、

「さるくん、おおかみ氏の能力はうたがう余地がない。明々白々の事実で、なんならばくが保証人になろう」

さるはかぶりを横にふつて、

「口でいうだけでは、証拠にならない。やはりおおかみさんに、実際の行為で証明してもらいたいですね。では、こうしよう。むこうに、大きなひのきの木が立っている。あの木のところまで、か



けくらべをする。競走路はこの小道、ほかの道を走ってはいけない。それから、おおかみはうさぎより二十歩前の地点からスタートする、そして、もしうさぎがおおかみに追いつけなければ、うさぎの負けて、そのときはおおかみに食われてもしかたがない。だが、もし追いついたら、おおかみはほらふきにすぎない、うさぎを食う資格はない、ということになります」

おおかみは心の中で、へうさがおおかみより足がはやいとは、きいたためしがないし、おまけに二十歩のハンディがつくんじゃ、問題になるまでと、二つ返事で、「よかろう」といいました。きつねが例によって、横から口をはさみました。

「試合はまだこれからだが、勝負はもうとっくについているようなものだ。森林きつてのランニング選手のおおかみくんとは、いわず、この足のみじかいほくだって、うさぎなんかには、負けんからねえ」

さるはわらって、

「では、きみもおおかみさんと同じところから走ってみてください。勝ったら、

うさぎの肉をわけてもらう、ということにしましょう」

きつねは、ぼんと胸をたたいて、

「よろしい、こう見えても、毛なみはわるくないんだからね」

こうして、かけくらべがはじまりました。さるが合図の口笛をならすと、おおかみときつねは、先をあらそってかけだしました。さるは大声をはりあげて、

「がんばれえ、そら追いこせえ、もうすぐだっ！」

そのとき、バサッと大きな音がして、おおかみときつねが、おとし穴におちこみました。穴の底まで、もんどりうってころげおちてから、やっと、してやられたことに気がつき、死にもぐるいではいあがろうとしますが、穴が深いために、どうしてもあがることはできません。

さるとうさぎがその穴のふちに立って、ゆかいそうにわらいました。

(カザフ族・甘肅省)

十二月老人のはなし

「一年には何か月あるか、おまえさんはごぞんじかな」

「そらあ、知ってますよ。一年は十二か月でしょう」

「では、どんな月があるか、いってこらん」

「一月、二月、三月、四月、五月、六月、それから……七月、八月、九月、十月、十一月、十二月。

正月がすぎないと二月はやってこないし、二月がすぎないと三月はやってこない、そうでしょう？」

「まったくじゃ。ところで、わしらのあいだには、正月に〈十二月老人〉の話をして、興ずるなら

わしがあるのじゃ。おもしろい話じゃが、聞いたことおありかな？」

「いいえ、聞いたことありません。どうか話してください」

「うむ、よかろう！」

……むかし、わしらウズベクのある村に、わるいおばあさんが住んでおった。おばあさんには、



ふたりの娘がいた。下の娘はじぶんが生んだ子で、上の娘はままだった。おばあさんは、じぶんの娘だけかわいがって、上の娘にはつらくあたった。上の娘には、妹の食へのこしのごはんしか食べさせず、妹がさんざん着古して破れた着物しか着せなかった。

とてもさむい冬のことであった。お正月はまだやってこず、まっ白い雪が、森の木々をすっかりうずめていた。人びとはいろいろのそばで、しずかに火にあたりながら、だれも外に出ようとしなかつた。

こんなさむいある晩のことであった。窓の外はまっくらで、なんにも見えず、風だけがビュービューと、おそろしくうなっていた。するとおばあさんは、上の娘に大声でいつつけた。

「ちよいと、おまえ、森へ行って花をつんでおいて、あすは妹のおたんじょう日だからね、はやくおいき」

びっくりした上の娘は、おばあさんのいつつけは、いったいほんきなのだろうか、それともじょうだんなのだろうか、と考えた。森はまるで死んだようにこおっている。花も草も、とくにここへ死んでしまって、のこっているのは、おそろしいけども足の足あとだけだというのに、いったいどこへ花をつみにいけというのかしら。そんなむりな話ってないわ！

「はやくおし！ 死にっこないよ。手ぶらでかえってきたら、しようちしないからねっ。ほら、このかごをもっていくのだよ」